

カテリネツラ      イタリア

昔むかし、あるところに、カテリネツラという女の子がいました。ある日、カテリネツラは、ドーナツが食べたくなりました。そこで、お母さんにいいました。

「ねえ、お母さん、ドーナツを作ってよ」

「ええ、いいわ。作ってあげるよ。でも、フライパンがないから、魔物の所へ行って借りてきてちょうだい」

カテリネツラは、すぐにかけて出して行って、村はずれの魔物の家に行きました。

「ねえ、フライパンを貸してちょうだい。お母さんが、ドーナツを作ってくれるの」

「ああ、いいよ。わしにもドーナツをくれるならね」

「ええ、あなたにもドーナツをあげるわ」

カテリネツラは、きっぱりといいました。

フライパンを持って帰ると、お母さんは、ドーナツをどっさり作ってくれました。そして、魔物の分をちゃんと残して、残りをふたりで食べました。

食べ終わると、カテリネツラは、ドーナツを入れたフライパンを持って、魔物の家に戻しに行きました。歩いていると、ドーナツのいいにおいがして、食べたくてたまらなくなりました。

「ひとつくらい、食べたって分からないわよね」

カテリネツラは、ドーナツをひとつ食べました。

「ああ、おいしかった。もうひとつくらい、かまわないわよね」

カテリネツラは、もうひとつ、食べました。

「ああ、なんておいしいんですよ。もうひとつ、かまわないわよね」

そうやって、ドーナツをぜんぶ食べてしまいました。

「ああ、どうしよう。魔物にやる分がなくなっちゃった」

カテリネツラが、あたりを見回すと、道にロバの糞が落ちていて湯気を立てていました。

「あら、ちょうどいい物があったわ」

カテリネツラは、ロバの糞をひろって、フライパンに入れました。

やがて、魔物の家に着きました。カテリネツラは、家の中にむかって、

「ドーナツを持って来たわよ」と声をかけました。そして、フライパンを戸口の所に置くと、いちもくさんに逃げ出しました。

魔物は、家の中から出て来て、フライパンを見ました。

「これは、なんだ！ロバの糞じゃないか！ひどいやつだ、カテリネツラ。おまえを食べる！」

魔物はおこつて、カテリネツラのとを追いかけてきました。

カテリネツラは、家の中に逃げこみました。が、魔物はすぐにやって来ました。

「カテリネツラ、おれはいま、おまえの家の前だ」

カテリネツラは、どうしていいかわかりません。

「カテリネツラ、おれはいま、階段の一段目だ」

カテリネツラは、かくれる所を探しました。

「カテリネツラ、おれはいま、二段目だ」

けれども、かくれる所が見つかりません。

「カテリネツラ、おれはいま、三段目だ」

カテリネツラは、ベッドに上がりました。

「カテリネツラ、おれはいま、四段目だ」

カテリネツラは、ふとんをかぶりました。

「カテリネツラ、おれはいま、五段目だ」

カテリネツラは、ぎゅっと目をつぶりました。

「カテリネツラ、おれはいま、ドアの前だ」

そのとたん、魔物は、ドアを破って、部屋にとびこんで来ました。

「カテリネツラ、さあ食べちゃうぞ」

魔物は、カテリネツラをひと口に食べてしまいましたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『語りのメソッド』剣持弘子／三弥井書店